

達成指向と多様性受容



独立行政法人統計センター
椿 広計

JSQCが最初に入った学会である。大学院入学が決まった際、師匠の奥野忠一先生が、「君は数理統計よりは応用統計が向いているので、品質管理学会に入ってはどうか」と勧められた。JSQCには鷲尾泰俊先生主査の縮小推定量の研究会があり、この会が修論指導場だった。一統計学徒には、田口玄一先生の縮小推定を理解し、応用することが唯一の価値だった。当時修論生ながらISO TC 69「統計的方法の適用」国内委員会に数値計算支援で参加した。その際、石川馨先生から「もっと管理図を勉強しなさい」と言われたが、不覚にも何の意味があるのか分からなかった。修士修了後大学に職を得て、品質誌編集委員となり、赤尾洋二先生、久米均先生から論文査読の方法や特集企画の在り方などを一から学んだ。気がついてみれば、35年以上も品質管理学会に留まっている。

今回2度目の副会長を拝命して、改めて品質管理学を統計家である自分がどう捉えているかを考えてみた。

品質管理学は、品(Excellence)とそれに備わる質(Quality)の最良化を目的としたマネジメント設計科学ないしは工学である。設計科学は、物理学と異なり、価値を実現することを目的とした科学である。品質管理学は、質の維持・保証のための運用や、品を創生したり、質を改善したりする価値ある問題の発見・その解決案策定と実装に資する方法などがその研究・研鑽の対象である。真の品と質実現に必要なならば、貪欲に他学術分野の方法を収集・借用する品の無い学術分野たるべきである。

以前の巻頭言でも強調したが、品と質は、コスト

や生産性のように予め定義されるものではない。何が品で何が質たりえるかは、組織自らがデザインするものである。品質は、顧客とのアクティブなコミュニケーションの中で、顧客と共に成長する多様性・流動性を持った価値概念でなければならない。

品と質のマネジメント実践者にとって、重要なのは社会や顧客にとって、この自由度の高い、品と質の達成のためにベストを尽くすというプロフェッショナルリズムである。その目的を共有し、少しでも方法論を進化・深化させようというのがJSQCである。

しかし、そのためには、自身の力量や視点の不完全性を意識すること、つまり他人が気づいていることに自身が気づいていない危険を常に意識する必要がある。組織として価値を達成する手段にしても、もちろん得意技で勝負というのが通例であろうが、JSQC会員は、自身ができる、できないは別として、この方法でなければならないという惑溺からは自由でなければならない。事実は勿論、他人、他分野から学ぶという、多様な価値を受信する能力を鍛えなければならない。

石川馨先生生誕100周年に当たり、自ら学べと諭された管理図の意義も改めて考えなおすと「自身の力量の想定を超えた現実を可視化し、そこから改革のチャンスを学習する」と想像するに至った。品質を実現する登山口は幾らでもあるという先生の教えも、多様性受容と共に、価値実現には自分たちが不得意な、あるいは気づかない登山口が必要な場合があると捉えることもできる。現在のJSQCが気づいていない価値有る活動を会員全体・産官学総力で発見・実践できないかと思う今日この頃である。